

Title	経済学諸概念の社会心理学的考察 (上)
Sub Title	
Author	上原, 好咲
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.5 (1924. 5) ,p.681(61)- 693(73)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19240501-0061

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

雜 錄

經濟學諸概念の社會
心理學的考察 (上)

上 原 好 咲

一
從來の經濟學上の諸概念は、先づ物理學並に生物學の眞理に照らして考察し、更に最近の社會心理學の上から充分に分析すると、そこに多くの改更を要するものがある。そして經濟學其ものは、人種、傳統、郷土、社會状態を異にする個別的社會に就て、先づ比較經濟學 (Comparative Economics) 或は郷土經濟學 (Regional Economics) として成立し、そこに中間的な綜合と原理とを完成した後でなければ、普遍的な科學

としての經濟學に進み得ない。

斯く説く印度人 Radhakamal Mukerjee 教授の學說に就き、その物理學的並に生物學的研究の部分を、本誌第十六卷第十一、十二號に於ける拙稿に紹介したので、續いてその社會心理學的考察の部分を本稿に紹介したいと思ふ。

經濟學の社會力學的研究、換言すると經濟諸現象を、人間社會なる一有機組織内に於ける複雑な心理的反動現象と觀て、夫れを分析することに於て、教授は先づ社會生活を營む個人の性質を概説する所から始める。

教授に依ると從來の經濟學の考へて居る個人は、十八世紀の理論家が考へて居た個人である。換言すると絶對的な諸權利を有つ自己中心の純理論的な人間である。併し二十世紀の生物學及び心理學の教ふる個人は、そんな死んだ個人ではない。即ち生きた個人の慾望、感興、要

求などは單に狹隘な利己心や、個人的な理智判斷乃至利害打算のみから生み出されるものではなくて、集團生活及び集團意識からも生ずるのである。生きた個人の組織即ち一個の人間なる有機體は、血縁の感情、隣人愛、相互同感などを含蓄するものであつて、是れ等が慾望と満足との性質を決定する力は甚だ大なるのである。

故に、自然の純理論的半面のみを見て來たこ同時に、諸般の競争現象のみを偏重して來た從來の經濟學に反して、新しい經濟學は一方に於て自然の生物學的、無意識的半面並に、人種的衝動を充分に考察すると共に他方に於て競争の半面の協同現象をば高調せねばならぬ。

家庭を作り、群衆生活を作り、國家を作り、産業社會を作つた血縁の感情、隣人愛、相互同感の本能的意識は、個人主義的な理性即ち練磨された利己心よりも先天的なものである。但し

斯々る「行爲の足型」(action-patterns)とも謂ふべきものは、永久に固定不變ではない。夫れ等は、一定人種の生活の開化即ち其文化の歴史的發展に伴れて、自ら發達し膨脹し行くものではあるが、唯夫れ等は起源に於て人種的であると共に、發達に於ても亦飽くまで人種的なるのである。

要するに一定社會の個人の意思及び理性が一面に於て個人的に、また他面に於て社會的に發達し行く上の先天的な條件は素よりその個人の意思及び理性自らの力ではなく、或はまた正統經濟學派の稽ふる如く、利慾の念乃至は洗練された利己觀念ではなくて、その社會の構成員間に共通な「頭腦の標準型」(brain-patterns)と、個人的意識に調和する社會的意識とである。

斯くて經濟學の基礎として、古い純理的な心理學を棄て、新しい生物學的な心理學を採り入

れるといふことは、經濟學が必然的に客觀的鄉土的に變るといふことを意味する。換言すれば經濟學はアイデオリズムからリアリズム乃至は、アイデアル、リアリズムに推移するのである。

二

先づ人間の輪廓を大體右の如く見たム教授は、進んで人間の働きの分析に入る。

人間の働きは、一面物理學的並に生物學的條件に支配されると共に(前掲拙稿參照)、その半面には心理的且つ社會的の動因を有つ。即ち行爲者の有機的欲求及び作用に發する慾望乃至感興といふ如きものは、またその人間の行爲の心理的並に社會的動因たるのである。そして價值、生産、消費等を社會的に且つ心理的に條件付けるものは、此慾望であるが故、夫れ等諸問題の社會心理學的研究の基礎としても、此慾望

の研究は當然の第一階梯とならねばならぬ。

斯かる立場から教授は、第一に人間の生産的行爲の進歩し行く方向、即ち經濟的前進の方面を示すものとしての、一般的慾望の進化を論じ進んで個別的慾望及び満足を、刺戟及び反動の法則を通じて、純心理學的に分析して、限界效用説の改訂に及んで居る。

但しその前段即ち慾望の進化に就ては、茲には次の如く簡單に一瞥して置く。即ち人間の心理的進化過程は、人間が原始的有機的本有性として具備する思惟及び本能から出發して、簡單幼稚な性情及び衝動から、意識的欠乏感及び意識的慾望の形を取る複雑な性情及び衝動に進む。換言すると自己保存及び種族保存上の原始的本能的慾望から、宗教的、藝術的、知的、道德的な慾望に進むのが、慾望の進化であるが、此進化を規定する法則は、慾望の幾何學的進歩

といふことである。則ち一定の欲望は一定の行爲を創造するが、その行爲は所謂「感興の轉換」(transfer of interest)に依つて、その行爲自らの爲めに要求され、そこに新しい行爲が繼起する。その新しい行爲はまたその行爲自身の爲めの欲望を生み、そこにまた第三の行爲が起る。斯くて同様の反覆が續くのである。這是生物學上の前進的適應の法則の、心理學的表明に外ならないのであつて、生命の前進的適應は、欲望の連續的進歩を含むのである。そこで此欲望の連續的幾何學的進歩は、欲望の動物的から人間的、官能的から知的乃至藝術的、利己的から利他的、物質的黨心的から精神的博愛的への推移を示し、斯くて人間が進歩的に四圍の環境に適應しつゝ、理想の完成に向ふ道程と一致するのである。

三

割を許さず、并は全體又は全體の複合として追加され或は除去され得るに過ぎない。乍然、經濟財の消費上に於ける差別的効用、限界効用、及び全効用に關する理論は、その性質上、感覺上乃至感情上の刺激及び反應に關する心理學上の法則と類比するものであるが故、右心理學上の法則を訂正し補足し擴充することに依つて、次の如く經濟學上の欲望及び満足の心理學的解釋を下し得るのである。換言すると既成の心理學上の該法則は、改更されて始めて財貨と満足との間の量的關係の説明に適合し得る。

先づ單一感情("elementary affective reactions")及び満足の如き複合感情("compound states or psychoses")と區別されて居る感覺("sensory reactions")に關する有名なウェーヘル・フェヒネルの法則(註一)は、刺激及び反應に關する法則中の最も基礎的なものとされて居るが故、その

所で具體的の欲望及び満足の心理學分析だが、此部分は純粹な心理學說としても興味があり、殊に夫れが經濟學と根強く結び付けられて居るといふ點に於て、一般の經濟學説明と大に趣を異にすると思はれるが故に、以下教授の所説を殆ど逐字的に譯出し、多少の補註を加へて讀者に提供しやうと思ふ。

偕てエネルギー學上の諸法則及び人體生理學上の諸法則が、生産分配なる經濟現象を其根底に於て支配する如く、感覺上並に感情上の刺激及び反應に關する心理學上の根本諸法則は、經濟學上の効用、價值、満足、消費等の研究に、科學的基礎を供するものである。尤も刺激と反應との間の量的關係を支配する法則は、個別的刺激の態度を取扱ふに當つて、その最小微量に分割された單位の連續的追加に依り得るのであるが、經濟學の取扱ふ財貨の單位は、斯かる分

教ふる所を見るとき次の如くである——

(一) 刺激は一定の張度に達しなければ、意識的の感覺を起さぬ、この最小限度を刺激閾といふ。

(二) 感覺の強度の増加は、刺激の強度の等量的増加("equal increments")に伴はれず、その等比的増加("equal proportional increments")に伴はれる。之辨別閾に關する公理である(註二)例へば十單位の刺激に續いて、十二單位の刺激が加へられるとすると、そこに感覺の強度に一定の増加が生ずるが既に二十單位の刺激が加へられて居る、そこに起つて居る感覺に前の場合と同一強度の増加を生せしめる爲めには、24:20::12:10から、二十二單位の刺激ではなくて、二十四單位の刺激を加へねばならぬ。即ち二十單位の刺激に追加される四單位の刺激は、十單位に追加される二單位の刺激と同じ強度の

感覺を追加發生せしめる。換言すると刺戟の強度が漸次増加されて行く時、追加される刺戟の各單位の感覺價は遞減するのである。此心理學上の法則は、經濟學上の効用遞減の法則の基礎となる。

(三) 次に刺戟が一定の最大強度に達すると、それ以上の刺戟に對する感覺は起らぬことになる。この最大強度を刺戟頂といふ。

ウントに依ると右感覺及び刺戟に關する法則は、感覺刺戟に同伴する快不快の感情に就ては適用され得ぬといふ。即ち彼れは感情反應が最大對立の間を變化するもので、最大差異の間を變化するものではないことを説くのである(註三)。併し感情に關する曲線が如何なるものであつても複合感情たる、經濟的満足は、不快の零になる極點に運ばれるものではなく、开は上向、絶頂、下降の諸現象を呈した後、その對立(即

ち嫌惡)に移るのであつて、満足がその點に達した時、需要は停止し下向曲線は終る。斯くて効用遞減乃至限界効用なる、經濟現象は、一般的感覺現象乃至感情現象に關する右の法則の、複雑な心理現象に對する變態特殊の一適用に過ぎず、従つて効用の經濟學的研究が、心理學の基本法則を無視し得ないことを知るのである。

(註一) 心理學上普通には(二)を以てウェーベルの法則と呼び、「ウェーベル・フェヒネルの法則」なる概括は未だ廣く採用されて居ないやうである。ウェーベルの法則としてエビングハッスが其「簡單なる言葉で」言ひ表はして居る所は、「感覺が等差級数を以て増大する爲めには、刺戟は等比級数を以て増大せねばならぬ」と。

(註二) 刺戟頂と刺戟頂との間に、感覺の強度の系列は連續的に變化するが、此場合にも刺戟の微量の増減は感覺に上らぬ。そしてその感覺の最小可知差異を「辨別閾」といふ。

(註三) 眞の正反對は感情にのみあつて、感覺にはないといふ意味に於てウントは「感情の性質は最大對立によつて限られ、感覺の性質は最大差異によつて限られる」といふ。

四

乍然、感覺と刺戟との關係を規定するものとしてのウェーベル・フェヒネルの法則は、それ自身既に改訂補足を要するものがある。そして此補足改訂は、單一感情及び經濟的満足の如き複合感情の範圍に關して、右法則の重要性及び適合性を附與するものである。

A 先づ刺戟閾又は覺閾なるものは、感覺に於てすら時には、此法則の想像する如く嚴格に固定して居ない場合がある。即ち神經學上の實驗に依ると一定の豫備的刺戟は、夫れが意識の域に上らない場合に於ても、當該神經要素の惰性又は遲緩性を低下することに依つて、覺閾を低下し、爲めに左なくば必要であつた程度以下の強度の刺戟が、感覺を喚び起すのである。之潜在時間が減せられて居るのであつて、斯かる場合に所謂「カナリゼーション」なる状態が出

現するのである。此事は經濟上に重要な意義を有つ、假令ば一定の産業組織が、生活標準乃至雇傭状態等に於て、民衆に或程度の活力及び興奮性を確保して置くこと、その活力及び興奮性は、慾望感を鋭敏にし依つて需要を刺戟して、満足の程度の上向又は効用の増進を結果するのである。之に反して營養不良な萎縮した社會に於ける、習慣的に低い生活標準乃至活力の缺如は、慾望の規模及び効用の尺度を低下させる。經濟生活及び經濟組織の幼稚な未開人の社會、若くはその發達した社會に於ける廢類した特殊階級の社會に於て、此惰性乃至遲緩性は、自ら經濟的停頓の結果であると共に、満足の強度を低下させること乃至は需要を阻碍することに於て、經濟的停頓の原因となるのである。

B 刺戟結果又は満足を決定する動因に、對比(註四)及び順應(註五)がある。對比は意識の相

對性に關する一般的の公理に従ふ。順應は一面個人の有機組織内に於ける、習慣性構成の基礎並に神經組織又は性情形成の基礎を供すると共に、他面刺戟結果又は満足に關する點に於て、**開は次の二途に働く、即ち順應は刺戟の旋動を輕減し、以てその觸磨を緩和する。尤も開は感情に就ては餘り明瞭正確ではないが、感覺に於ては確實で明瞭で敏速である。次で順應は需要を、持久的、習慣的、集合的にする。相異なる多くの財貨に關する消費に、習慣上並びに形式上の相異があり、此相異なる消費の形式及び標準が、相異なる經濟社會に於て、習慣的な慾望に凝結して居ることを考へる時、右順應に關する研究の重要であることを知るであらう。そして夫れ等の習慣的慾望が、効用に關する一般的法則の働きを改更する所の、順應の定理に基礎を置く需要たるのである。**

は、直ちに知覺される。そして感官の他物に對する順應作用として、原則上其物は特別の強度を以て知覺されるのである。道は明かに生存競争上最も好都合な備へである。闘争上、驚愕程危険なものはない。(メーヤー英譯『エビングハウスの心理學』七四頁)

C 更にウェーベル・フエヒネルの法則は他の根本的な改訂を要する。一體刺戟の等比的増加は、感覺の等量的追加を來す、といふことは刺戟強度の系列を示す曲線の中間の部分に關してのみ眞たるに止まる(註六)が、この感覺に關する點は姑く措くとも經濟學が満足乃至効用といふ如き複雑な心理現象を取扱ふ以上大に考量せねばならぬ所の、感情に關する範圍に亘つては、此法則は同様の缺陷から到底適合しないのである。即ち感情反應、茲では満足の、強度を示す曲線を書いてみると、圖の直上部の或部分は、効用の下降ではなくて上向を示すことになるのである。例へば十單位に附加された二單位を以

(註四) 通常の心理學に於ては對比も順應も感覺上殊に視覺上の現象として研究されて居るが、A教授は夫れを感覺現象にまで結び付けて居る譯である。従つて感覺上の對比及び順應を知らなければ、此段は一寸解りにくいので、高橋稜氏の『心理學』に其説明を求めると――

「……他和の強い赤紙の上に灰色の小紙片を置いて見るさまは、灰色は著しく綠色を帯びて見え、又同様の灰色の紙片を綠色紙の上に置いて見れば著しく赤色を帯びて見え、兩灰色が同一の紙から成ることは思へぬ程である。これ視野の一部の刺戟が隣接部に反對の感覺を生ぜしめたのであつて、所謂對比の現象である――」

(註五) 「……一定時の後最大強度になつた感覺は刺戟の連續する限り同一強度を維持して行くかといふを決して然らず、間もなく色彩ならば飽和度を、無色光覺ならば光度を變ずる。即ち色は飽和を、白は光度を漸次減じ、黒は光度を漸次増し、皆中性の灰色に近づかんとする。……これ、前に述べた感覺の順應現象であつて、……かく順應した眼は現在刺戟には鈍感になるが、反對色、又は反對光度に對しては非常に敏感になる。……」(前記書一四頁一七一頁)更にエビングハウスの依つて補足すると――「同様の順應現象は他の感覺機關にも起る。即ち皮膚上の繼續的壓迫、極端な程度でない溫度の不變、香氣の永續などは知覺されぬに至る。然るに斯なるもの、直ぐ今まで存在して居た状態と異なる状態

て計量された財貨の消費の結果する満足が、二十單位に附加された、二單位に依つて計量された、財貨の消費の結果する満足より小なるのである。斯くて前段に説いた如く、財貨の一定の附加量から生ずる満足の強度は、遞減せずして、一定點までは遞増するのである。即ち法則(二)の説明に擧げた $10:12::20:24$ なる比例式は、 $[10:12][20:24]$ 又は 21 〔 1 〕内兩者に於て満足の等しいことを示すに替はられねばならぬ。之効用上向の現象であるが、此現象が續くのは一定點までのことである。即ち消費は甚だ迅速に、財貨の等比的追加量が満足の等比的増加を伴ふといふ、一定の域に達するのである。此域に於ては効用は大體不動のまゝに止まる。そして更に其上消費の増加が續けられて行くと、効用遞減なる現象が表はれる。換言すると財貨の等比的追加量が、満足の等量的増加を伴ふ

(10: 12:: 20: 24)に至るのである。即ち斯くて始めて二十單位に追加する四單位は、十單位に追加する二單位と同等の満足價(感情價、感覺價といふと同様の語法)を有ち、従つて財貨一單位の効用は、消費の増加と共に漸減することになる。オーストリア學派の限界効用説は此事實に立脚して居るものに他ならない。而かも以上が眞實の全部ではなくて未だ先さがあるのである。

即ち更に消費を増加して行くと、財貨の等比的追加量は、満足の等量増加を伴はないで漸減を伴ふに至る。例へば[20 24]は[40 48]に等しからずして[40 56]に等しくなる。斯くて進むと法則(三)の示す最大刺激に達するのであつて、その後には反應の増加はない。そして此點に到ると感情に快から不快への變化が生じ、その窮極には意識の休止が來たるといふのが理論

併し効用が漸減して遂に衰頹から害惡に推移する現象は、發達した雜多な欲望の世界に於けるより、幼稚な簡單な欲望の世界に於ける方が、遙かに顯着に行はれる、乃ち感官的、自然主義的、物質的、機能的欲望の世界に於ては、心理的神経的刺戟の永久に更新され行く通道と雜多な軌道を備へる、知的、藝術的、精神的、社會的欲望の世界に於けるより、右の現象が遙かに大なる範圍に行はれるのである。

E 更に群衆心理學の上から、また一つの新しい考量が加へられる。乃ち群衆が構成個人に反響及び共鳴なる影響を與へることは、同情、模倣、宣傳、遊戯等に關する公理に依つて擁護されて居る所であるが、此影響の結果として、一定量の刺戟が、個人の交感衆團の間に共通に與へられると、その反應例へば満足の量は常に相當的に増加する。即ち神經の興奮性及び反應

上の順序である。

(註六) エビングハウスの同様の所論をなして居る(前掲書 七三頁)

D 併し刺戟頂の後に正から負への記號の變化及び休止が來たるといふ右の公理は、雜多、差別、新奇なる分化作用に依つて、大體現象未だ然の内に變更される。此變更は經濟上の價值及び満足の分野の如きに於て、殊に顯著に行はれる。即ち各個別的欲望は雜多、差別、新奇に分裂して、斯くて欲望の力學的運動又は前進上に、新しい軌道及び神經連絡に基づく新循環が開始され、そこに感興増加乃至効用上向の現象が再現する。經濟的價值の世界が絶えず開發されて行くのは斯かる現象に依るのであつて、因つて満足は、飽滿や倦怠、衰頹や休止から救はれて、永久に上向し伸張し行く循環を續け得るのである。

は群衆間に於ける同感の數的和に依つて有力に影響されると共に、开は又一定の心理學的的地位に於ける個人の神經組織の共鳴的宣傳性の上に働く群衆心理的の勢力に依つて、大に影響されるのである。斯くて共通的な社會的立場から結果する複合的影響に負ふ満足の増加量、之普通に「社會的効用」と呼ばれるもの、眞實である。「社會的効用」に關する從來の經濟學の陳套な概念は、數學的且つ機械的なものに過ぎず、即ち一種の個人的効用の平均又は總計を示すものに過ぎない。所が茲に謂ふ社會的効用とは、具體的一定個人に體現する満足の一定部分である。その部分とは、一定刺戟に對する満足の、その刺戟に對する自然的反應としての量を越へた、社會的立場に基づく同感の數的和、共鳴、宣傳の、複雑な結果に成る部分量を意味するのである。此社會的効用なる増加價値は、吾

等の個人的消費が、協同的社會的消費に發達する所に得られるのである。

最後に考量すべきは、以上に分析した満足若くは効用の量の測定である。實驗心理學の進歩は未だ感情價又は満足價を測量し、以て効用量を算出すべき獨立の尺度を供するまでには達して居ない。這是生命活力學及びエネルギー學の發達に伴ひつゝ、そこに基礎を置く心理學的實驗の今後の進歩に待たねばならぬ。換言すると以上の公理は未だ經驗論的の綜合に過ぎないのであつて、その科學的洗練と實驗的證明とは將來に期すべきであるが、それと同時に經濟上の價格と消費とに關する統計、乃至兩者の變化及び相關々係を示す對線は、効用の法則を實踐上に示す重要な例證となり、前記公理の説明材料に供され得るのである。

五

甚しく異なるのであつて、此事あるが爲めに取引は成立つのである。そこで財貨が價格上同等であるといふ事は、雜多な効用の任意の一つが、個人の選擇若くは需要に對して、同等に開放されて居るといふことを意味する。斯くて財貨の價格は、次の如き條件の下に於ける需要と供給との均衡上に依存して居るといふことになる――

(一) 需要――需要は限界効用に左右されるが併し此事には他の個人又は社會が當該財貨に認定する價値が一要素として含まれる。従つて社會的價値の規模は、價格の間接的決定要素となるのである。

(二) 供給――供給はその動因の一つとして生産費關係を含む。生産費は、當該財貨の生産行程中に費されたエネルギーの量に對する、報酬量の割合に依存する。そして殊に重要な點と

以上慾像の心理學的分析を詳細に試みて居るム教授は、限界効用説を比較的簡單に片付けて居る。即ち限界効用の下降曲線の内には、比較的水平な部分及び上向の部分のあることを極めて簡單に再言した後、限界効用と價格との關係を次の如く論ずるに於て、主觀價値論と客觀價値論との折衷説に立つ觀がある需要供給説の一種をなして居る。

即ち限界効用が價格を決定するといふことは意味をなさない。蓋し特定の個人的効用を離れた社會的効用なるものはなく、そしてその個人的効用を測定する共通の稱呼なるものは、價格を措いて他にないからである。故に効用が價格を決定するに説くのは重語に過ぎないのであつて、財貨相互の同値及び代替とは、價格の同等を意味するものに他ならない。但し同價格の財貨も、并が各個人に對して持つ効用は、夫々

して并は、能率保持の標準上から見た勞働の生理的補填並びに維持費に依存する。

併し需要と供給とは獨立に働くものではない。社會的價値及び効用に依つて決定される需要と、自然的生理的の生産費に依つて決定される供給とは、相關々係に立つのであつて、斯くて價格は、二個の相寄る可變事實の一定の作用の均衡を含むのである。そして斯かる均衡を語るものは、實際上の價格表以外には存しないが、而も價格表が右の均衡を示す程度は甚だ粗放なるを免れない。價格を以て一個の可變事實、例へば生産費又は限界効用の如きもの、作用に歸せんとする數學的分析の如きは、到底此難問題を説き得ないのであると。